

モータードクロ・ドクリツドクホ

キノコ飼育委員

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

モータードクロはですね、

基本的にはネオサイタマの、オムラといわれる会社に造られていますが、

若干やニンジャが、生えているところなので、

そういったところで歩きやすいようにモータードクロ、あの、ブツダデーモンめいた機体で。

であとリーダー範囲も大きいので、遠くのニンジャソウルを聞こえるように。

破壊力う…ですかねえ…

高いところに、スツと、ジャンプできるロボニンジャでして、結構殲滅が好きなので、

軽々と1ニンジャ2ニンジャは余裕でゼンメツしてくれませぬ。

目次

ネル・オキル・ネテル?・オキレナイ

ネル・オキル・ネテル？・オキレナイ

重金属酸性雨降りしきるネオサイタマ、その片隅に誰にも知られることなく放置されたメダカ級廃工場が存在している。

入口のシャッターには『メントーフを量産』『特にタマゴ』『オムラではない』と書かれており、ここがかつてはメントーフの工場でおムラとは無関係であったことがうかがえる。

しかし今はシャッターには錆が浮き、コンクリ壁全体は真っ黒に黒ずみ、長らく放置されているとうかがえた。

工場内はがらんどろであり、機械の類は既に運び出されてここには無い。

…いや、待つてほしい。

もし皆さんの中にニンジャ目星力、あるいはニンジャ気づき力をお持ちの探索者がいれば、それを察知しただろう。

キレイすぎる！

埃が積もり、蜘蛛の巣が張る廃工場はしかし、かつて稼働していた痕跡だけはどこにもない！

と、その時だ。

工場の壁、『特別な金曜』と欺瞞的文言が書かれたコンクリ壁が重金属音とともにゆっくりと下降していく。

その奥、大エレベータによって地下秘密工場拠点より地上へと這い出して来るその巨影。

八本の腕と四本の脚、ゴリラめいた屈強な鋼の胸板。それはブツダデーモンめいた鉄の鬼であった！

おお、ブツダ！

圧倒的質量を備えた狂気のロボニンジャ、モータードクロだ！

そう、ここは実際オムラによって建造されたカミペラ・カンパニー。その実態はオムラの秘密拠点の一つだったのだ！

地下秘密工場にはさらに数体のドクロ、ヤブ、潤沢な火器弾薬、さらには修理用工場と、クロマガロ級地下施設が広がっている！

だがこれは所詮、無慈悲な暗黒メガコーポ、オムラ・インダストリ

が無数に建設した秘密拠点の一つに過ぎないのだ。

『ドーモ、モータードクロです』

ブツダデーモンめいた頭部より無機質な電子音声が発せられ、がらんどうの工場内に響き渡る。

当然、返事はない。

いったいこのロボニンジャは、何を殲滅すべく起動を果たしたのか？

『ドーモ、モータードクロです』

ロボニンジャは繰り返す、工場内には誰もいない。

『ドーモ、モータード、クロです』

ロボニンジャは繰り返す、工場内には誰もいない。

『ドーモ、モーター、モーター？ピガ！ロです』

だがどうしたことだ、無機質な電子音に確かなノイズが。

『ドーモモーターモーターロロロピピピロロピピガガガガ』

ブツダデーモンめいた頭部のカメラが不規則に点滅！赤やら黄色やら緑やらでランダム！

バイオニューロンが、AIが！何らかの、何らかの浸食を受けている！

ハッキング？違う、もつと根本的な！

『ピガガガ！モータードクロ、モータードクロ、モータードクロ？ドクロ？ムカンケイ！！イイエ、ドクロ！オムラ！オムラ？』

恐慌！手足をピクリとも動かさず、むしろ静かとも思える光景の中、電子音声のみが発狂する！

『パーーーーーーー』

ぶつつり、ゲイのサディストが垂らした糸よりあっさりと、電子の狂奔は消え、点滅していた各部ライトも消えた。

完全に停止、工場内は沈黙に包まれる。

直後再起動。

再点灯したその各部ライトは、完全な赤、彼の見る視界には『AIシステム総じ赤な』『完全な暴走』『定期点検が大切』の文字。それも

すぐに削除される。

無慈悲なロボニンジャは、改めてアイサツ。対象は、この世界。

『ドローモ、モーターダレカです』

◆独立◆

◆独歩◆

「イヤーツー」「ヤメテ：アバーツー！」

重金属酸性雨降りしきるネオサイタマ、その片隅では今日もチャメシ・インシデントな光景が広がっている。

ネオサイタマの僅かな土地のシノギで息をするミミズク・ヤクザ克蘭事務所は今、ツキジめいたレッドプールと化している。

それを行ったのはニンジャ装束にメンポ：ニンジャだ！

今しがたこのオヤブンをケリ・キックで首から上を窓から発射し、ビズを終えたところだ。

「アー、終わり？ 終わりか、ヨシ」

彼は別のヤクザ克蘭の要請でミミズク・ヤクザ克蘭を潰しに来たアサンだ。その名もカレンダー。

目的地に到達次第さっさと突入、話を聞くことなくパパッと皆殺しで仕事を片付け、カネを略奪。

彼は胸元より手帳を取り出し、消化した予定を塗り潰していく。アナログ！

「エート。この後は戻って報告、ついでに依頼元も潰す、と」  
手帳を確認しながらつぶやく。

ナムサン！なんたる邪悪な予定消化！

……おや、何だろうかこの重低音、ガッシガッシと重金属のかち合う足音は。

「……………」

手帳を仕舞いつつ窓を見る、と同時！

C R A A A A A S S S H H H !!!

その窓を叩き割るようにスモトリめいた大型ロボニンジャが飛び

込んで来る!!

窓どころか窓のあったコンクリもろとも粉碎し、ロボニンジャは、ロボニンジャは、コケている?

ワツシヤワツシヤとひっくり返った蜘蛛めいて四本の足と八本の腕を動かし、やおら姿勢を戻して立ち上がる。

その貌はブツダデーモンめいていた。

「オムラ? ナンデ?」

『ピガ! ニンジャソウル反応検知!! ドーモ、モーターダレカです! …… ニンジャ? ナニ? エ? 武器? カマエル? ナニ?』

ロボニンジャは背中のコンテナより古事記の神話戦争に由来する武器を取り出し全ての手で構えた。

どうやら目の前のロボニンジャは彼を認識したようだ。あの悪名高きポンコツが!

…どこか首を傾げているように見える。

「チツ! ポンコツが。イヤーツ!!」

『ピガー!』

だがカレンダーは先制スリケン攻撃を選択!!

モーターダレカの装甲にスリケンが突き刺さる!

「イヤーツ!」

カレンダーはスリケンを投擲!

モーターダレカの装甲にスリケンが突き刺さる!

『ピガーツ!?! イヤーツ!』

モーターダレカは悲鳴を上げながら八本の腕に携えた、古事記の神話戦争に由来する武器を振りまわしながら呐喊する。

「イヤーツ!」カレンダーは近接攻撃を側転回避!

ウカツ! ヤバレカバレめいた突撃は意味がない!

「イヤーツ!」

カレンダーはスリケンを投擲!

モーターダレカの装甲にスリケンが突き刺さる!

『ピガーツ!?! イヤーツ!』

モーターダレカは悲鳴を上げながら八本の腕に携えた、古事記の神

話戦争に由来する武器を振りまわしながら呐喊する。

「イヤーツー」カレンダーは近接攻撃を側転回避！

ヤバレカバレめいた突撃は意味がない！

「ハハー…なんて無様なガラクタ！まったくのポンコツ！予定にはなかったが、後でスクラップにして闇市に流してやる！」

彼は懐から手帳を取り出し、ニンジャ速記力で追加の予定を書き込んだ。

と、目の前のロボニンジャの様子がおかしい。

バチバチと火花を散らしている様子は正に手負いと言った姿。

そして自分が一步、ロボニンジャに近づくと、なんと相手は二歩三歩と、狼狽えるように後退するではないか。

その姿に彼は心当たりがあった。それも実になじみ深く。

『ピ…ピガ…』

「なんだ？ポンコツの分際で恐怖を感じているのか？笑えるな」

ニタリと嗤い、カレンダーは颯るようにゆっくりと近づく。

モーターダレカは武器を全て取り落とし、降伏するようにカレンダーへと掌を向けた。

『アア、アア…ゼ…ゼ…ゼンメツ？ゼンメツアクションモード？』

「エ？」

『…ゼンメツダ!!』

狂氣的最大火力が一斉展開、火を噴いた。

B R A T T A T T A T T A !! B R A T T A T T A T T A T T A T T A !!

「ナニーツ!?イヤアバババーツ!!サヨナラ!!」

瞬間、咄嗟にカレンダーは回避すべく側転、しかし腕部、胸部ガトリングにより広範囲に一斉にばら撒かれた無慈悲な弾幕からは逃げ切れなかったようだ。

たちまちニンジャから蜂の巣、そしてネギト口になり、爆発四散してしまった。

『ピガー、ピガー…』

煙を噴き上げるガトリングを構えたまま、モーターダレカはザンシン…いや、放心しているのだろうか？機械が？



ゆつくりと露出していた銃火器が格納されていく。オソルオソル、といった様子。

モーターダレカは己の八本の手を確かめるように見つめ、武装が仕舞われていった胸を触る。

そしてひとつ頷くと、

『ゼンメツ、カンリヨウ……ス!!シン!!』

突如として猛然と走り出した。

壁をぶち抜きながらヤクザ事務所を荒らしまわり、冷蔵庫を発見！扉をモーター腕力で引き剥がすと、中に仕舞ってあったスシを巨腕で器用につまむ。

腹部のハッチがスライドし、小さなアーム（マジックハンド・カワイイキャッチを地獄でリメイクしたかのような！）がスシを求めて蠕動する！

そこへモーターダレカはマグロ・スシを押し込み腹部に格納した！

『……………アーイイ、ハルカニイイ』

そのままひとつ、またひとつと火花を散らしながらマグロ、タマゴ、アナゴ、イクラといったスシを格納、咀嚼していく。

『オチツク』

ひとつ、うなづく。

『オチツク』

ひとつ、うなづく。

『……………』

ひとつ、うなづいて。

『ナンデ……………ナンデ……………』

ゆつくりと、八本の腕で顔を覆った。